



TITLE:

時間と空間の語彙分類考察：「空間的分布を表す時間語彙」を通じて

AUTHOR(S):

寺崎, 知之

CITATION:

寺崎, 知之. 時間と空間の語彙分類考察：「空間的分布を表す時間語彙」を通じて. 言語科学論集 2011, 17: 77-90

ISSUE DATE:

2011-12

URL:

<https://doi.org/10.14989/155038>

RIGHT:

時間と空間の語彙分類考察

－「空間的分布を表す時間語彙」を通じて－

てらさき ともゆき
寺崎 知之

京都大学大学院／日本学術振興会

strosuss@marine.odn.ne.jp

1. はじめに

本論では、空間メタファーを用いた空間から時間への関係性が一般に唱えられる中で、それとは逆に、元来時間語彙であると思われるものが、空間に転用されていると見られる現象について観察する。この現象は定延 (2002) において「空間的分布を表す時間語彙」と名付けられたもので、時間と空間の関係性を見る上で非常に興味深い用例である。2 節では、この「空間的分布を表す時間語彙」という現象がどのようなものであるかを、定延 (2002) を基にして観察する。この中では、定延が提唱する「探索仮説」がどのようなものであるかについても俯瞰する。3 節では、「空間的分布を表す時間語彙」と「探索仮説」の関係性についての検討を行い、疑問点を明らかにする。最後に 4 節において、本論の主な論旨である同時的な事態把握との関係性を検討する。

2. 「空間的分布を表す時間語彙」の先行研究

2.1. 「空間的分布を表す時間語彙」とは何か

定延 (2002) において「空間的分布を表す時間語彙」と名付けられた現象は、以下の例文で示されるような現象のことを指す。

- (1) a. さっきレストランがあったけど、あそこはおいしいの？
- b. 本当に怖いところもときどきあったけど、まあ楽しかった。
- c. たまには愛称で呼ばれるのを嫌う人間がいるから注意が肝腎だ。

(定延 2002: 187)

(1a) は、バスの窓から外の風景をみていてレストランを見つけた人間の発話である。この場合に「レストランが今はもう無いが先刻はあった」などということを表しているのではない。「さっき」と言っているが、この語によって、少し前の時点というより、少し戻った地点を表していると言える。このように、「さっき」のような一般的には「時間を表す」と思われていた語によって、空間的な分布を表していると考えられる用法が、「空間的分布を表す時間語彙」である。次に (1b) は、遊園地でジェットコースターに初めて乗った人間の感想としての例文である。この場合、ジェットコースターのコースの上に「怖いとこ

る」は「常に」存在しているはずであるが、話し手は「ときどき」によって空間的分布のパターンを表していると考えられる。同様に、(1c)の「たまには」は愛称で呼ばれるのを嫌う人間が現在の世界に少なく分布していることを表す。つまり、時間的な分布ではなく、空間的なものに見える。

こうした用法の場合に、下線で与えられた「さっき」「ときどき」「たまには」などの共通しているのは、これらが「時間語彙」とされている部分である。一般的に時間的要素について指示していると考えられるいくつかの語彙が、(1)のような用例では、明らかに空間的な要素を指示している。これらが「空間を指示している」ことについては、簡単な応答テストで確認出来るだろう。

(2) 「さっきレストランがあったけど、あそこはおいしいの？」

「え？ {どこ/*いつ} のこと？」

(2)で分かる通りに、(1a)のような「さっき」を用いた疑問文に対して、その指示内容を「いつ」で問い返すのは不自然であり、この場合は「どこ」「どれ」などの方が自然である。このことは、時間要素のみが言及されているとするならば、大変奇妙なことであろう。

2.2. 「空間的分布を表す時間語彙」の検討と「視野仮説」

2.2.1. 「視野」とは

上述のような表現について、空間メタファーを主な分析手法として用い、「時間語彙は空間語彙の転用である」という主張を行うような場合には、一体どのような説明がなされるだろうか。定延は、そうした「空間メタファー論」からの1つの主張を仮想しており、その主張に「視野仮説」という呼称を付けている。これを端的に記述すれば、上記のような表現は、「空間的分布を表す時間語彙」などではなく、あくまで「時間的分布を表す時間語彙」であるという主張だ。その説明の道具立てとして、「視野(viewing frame)」という概念が持ち出される。

この「視野」とは、「人間が持つ、自分が見たり聞いたりしてとらえられる領域」として設定される。人の五感すべてが視野に含まれ、さらにテレビやインターネットなどで視野は拡張されることもあり、ある人間の視野は、その人間と共に移動する。視野は人間が生きている間じゅう（少なくとも意識ある間じゅう）続く。

この「視野」を持ち出すことで、(1)のような表現は、「空間的分布の表示」ではなく、「時点における視野の表示」と解釈できる。(1a)の場合ならば、「走行中のバスから流れゆく車外風景を眺める私の視野内に、先刻レストランがあった（つまり今しがたバスからレストランが見えた）けど～」となる。つまり、時間語彙「さっき」が表しているのは、「少し戻ったところ」という地点（空間）ではなく、やはり「先刻」という時点である。同様に「ときどき」や「たまには」も、「視野が時折どうであるか」を表す。

こうした考え方を、「視野仮説」と呼称する。これによって、(1) のような表現は「空間的用法がより基本的で、時間的用法は派生的である」という考えの反例にはならず、空間メタファーによる時間語彙の認定には影響を及ぼさないことになる。

2.2.2. 「視野仮説」の問題点

定延は、このような「視野仮説」は、明示的に言語化されない領域を指すという特徴についてはいまよくとらえられているが、いくつかの問題点があると指摘し、それらを 4 点に分けて論じている。

●問題①・空間表現の選り好み

「空間的分布を表す時間語彙」は、空間表現すべてが対応するわけではなく、使われる語彙を選り好みする。これらについて、「視野」を主とした体感領域だけでは説明しきれていないとする。以下の例を見よう。

(3) a. ?氷河期の世界にはマンモスの墓場もときどきあった。

b. ?うちの近所にはテニスコートがときどきあります。

(定延 2002: 190)

(3) の例文はどちらも不自然である。そして、(3a) の例文の場合、氷河期の世界などは体感領域として捉えにくいために、視野がはたらかずに不自然になる、という主張が通るため、視野仮説は説明力を有する。しかし、(3b) の場合、「うちの近所」は容易に視野に収めることが可能であるにも関わらず不自然さを持つ。このことは視野仮説では説明出来ない。

●問題②・時間語彙の選り好み

2 点目は、同じ状況でも用いられる時間語彙の方に制限がかかるという点である。具体的には、以下の例文で示される。

(4) {今/?数秒前に} レストランがあったよ。

(定延 2002: 190)

(4) では、同じように「ほんの何秒か前に見た」ということを説明する時に、「今」という語が自然なのに対し、同じようにして「数秒前」と言ってしまうといささか不自然になることが観察される。こうした「語彙の選り好み」については、視野を前提条件としただけの視野仮説では説明能力を持たないとする。また、「常時性を持つ時間語彙」の制限として、以下のような指摘もしている。

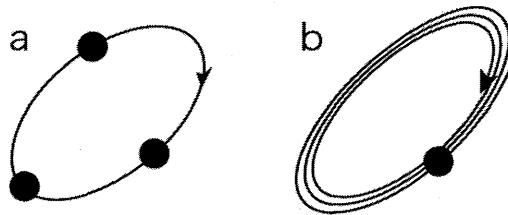
(5) a. なにしろ田舎だから無人駅がしょっちゅうあるわけよ。

b. ?なしろ田舎だから無人駅がいつもあるわけよ。

(5) の例においては、1つの電車の路線において、「たくさんの無人駅がある」ということを言った (5a) の場合は自然になるが、「全ての駅が無人駅である」場合に、(5b) のような表現は不適切であることが観察出来る。このような差は、視野仮説だけで説明されるものではない。

●問題③・分散の必要性

3 点目も用法制限の問題で、(1b) の例文は、たとえ複数回「体感」して視野に収めたとしても、「怖いところ」が1カ所では成り立たないとしている。



図：「ときどき」怖いところがある2つのパターン

図の a は、ジェットコースターに乗った時に1周で3カ所の「怖いところ」がある状態を示し、この場合、「怖いところがときどきあった」ということは自然である。他方、図の b の方は、ジェットコースターに乗った時に、同じコースを3回連続でグルグルと回り、そのコースの1周のうちに1カ所だけ「怖いところ」がある状態を示す。この時も、「ジェットコースターに乗ってから降りるまで」という経験の間には a の時と同様に3回の「怖いところ」を経験している（つまり視野に収めている）はずだが、これを「怖いところがときどきあった」と表現するのは適切とはいえない。このような違いは、視野仮説によっては説明されない部分である。

●問題④・存在表現とアリサマ表現

4 点目は、こうした用法がアリサマ表現を好まないという点である。ここでいう「アリサマ表現」とは、下の例で分かる通りに、「事物の状態を表示する表現」ということになるだろう。

(6) a. あと5分したら大きい木がありますよ。

b. ?あと5分したら木が大きいですよ。

(定延 2002: 192)

(6) の例は、2人連れ立って道を歩いている場面などを想定し、片方の人物が、もう5分程度歩いたところにとっても大きくて有名な木がある、ということを知っており、もう片方の人物に伝える、という文脈である。この時、(6a) のように表現するのは自然であるが、(6b) はいかにも不自然になる。「5分後の視野」を表示するのが視野仮説における説明だとしたら、このような表現も可能になると思われるのに、実際には明確な差が出てしまうのは一体何故であるか。

こうして4つの問題点をピックアップした結果、定延は「視野仮説ではこの現象を説明するには不充分である」と結論し、さらにこれを発展させた新たな仮説を提唱するに至る。

2.3. 「探索仮説」

2.3.1. 「探索」とは

上記のような「視野仮説」に残された問題点を解決するために定延が提案するのが、「人間の行動」という要素を加えた「探索仮説」である。ここで提案された「探索」の概念は以下のように説明される。

- (7) 人間は日々、それまで知らなかった空間（例えば見知らぬ部屋）を探索することによって、心内世界を広げ充実させる。探索が及ぶ領域（見知らぬ部屋）を探索領域と呼ぶ。探索には「探索領域はどんな様子なのか？」という問題意識が必要である。この問題意識を探索意識と呼ぶ。探索に臨む認知者の意気込みと言ってもよい。見知らぬ部屋を見ていても、ただぼんやりと眺めており、探索意識が無いのであれば、探索を行っているとは言えない。

(定延 2002: 192) (下線は執筆者)

また、これに加えてマクロ探索とマイクロ探索という概念も導入されており、たとえば「その部屋がどのようなものか?」「無くした手帳はどこか?」のように課題や意識が定まった探索はマクロ探索、そして探索領域である部屋の中で一瞬一瞬連続して行われる、スケールの小さな探索がマイクロ探索である。この「探索」という概念を2.2節までの「視野」に加味することによって、とりあげた4つの問題点を説明することが出来るとする。

2.3.2. 「探索仮説」による問題点の分析

(7) で「探索」という概念を導入したことにより、これを用いた人間の「探索活動」を定義する「探索仮説」が設定される。それは、およそ以下ようになる。

- (8) 「空間的分布を表す時間語彙」とは、見知らぬ空間を探索領域とするマイクロ探索という体験が語られる際に成り立つ現象である。

(定延 2002: 193)

例えば (1a) の場合、「さっきレストランがあったけど～」と言えるのは話し手はその街をよく知らず、街をバスから眺めて探索するということが自然であるから、「空間的分布を表す時間語彙」の使用条件である「探索」が容認される。(1b) もこれと同様である。(1c) に関してはいくらか適用法が異なるが、「話し手が社会をまだよくは知らず、従って社会を探索することは自然だからである」としている。また、「この話し手にかぎらず、社会という広大な空間は人間一般の探索領域と見なされることがよくある」ともあり、(1c) のような文脈においては、「空間的分布を表す時間語彙」の使用はごく自然なことであるとする。以下では、2.2節で持ち上がった視野仮説の問題点を1つずつ分析していく。

●問題①・空間表現の選り好み

(3b) の例文が不自然であるのは、話し手が近所界限を熟知しており、「近所」という空間自体が探索行動の対象にならないと考えられるからである。熟知した空間ゆえに、テニスコートの空間的分布を語る際に、わざわざそれを自分の探索体験の形で語るべき理由は無く、それ故に「空間的分布を表す時間語彙」に必要とされる探索が行われない。

●問題②・時間語彙の選り好み

(4) の例で「数秒前」よりも「いま」のような時間語彙が好まれるのは、この現象が探索という体験の表現に成立する現象であるためである。また、(5b) の例にあがった「いつも」のような常時性の時間語彙を嫌うのも、これらの語彙はきわめて規則的な分布を示すので、体験のまま表現する（「?田舎だから無人駅がいつもある」）よりも知識にまとめあげて表現する（「田舎だから駅はすべて無人駅だ」）方が自然である。

●問題③・分散の必要性

図1中bの設定が不自然なのは、正確には、モノが1カ所で分散していないこと自体が問題なのではなく、モノの所在をX箇所と特定出来るほどにその空間を熟知してしまっていることが問題である。つまり、ジェットコースターを3周する例の場合、1周目で既知ってしまった領域は探索する必要がなく、2周目以降は探索と捉えにくい。そうになると、探索によって与えられた「怖いところ」は1つだけであり、「ときどき」という語は不適となる。

●問題④・存在表現とアリサマ表現

(6) のような表現が存在表現を取りやすいのは、存在表現があらゆる表現の中で基本的な地位を占めているためである。我々は存在しない木について、その大きさを語ることは出来ない。つまり、アリサマ表現は存在表現を前提とした付加的なものであり、一瞬で行われるマイクロ探索において、存在情報はアリサマ情報よりも獲得されやすいと考えられ、「探

索」と密接に関わった「空間的分布を表す時間語彙」においては、存在表現の方が優先されることになる。

以上のように、人間の体感を基にした「視野仮説」に加えて「探索」を導入することにより、「空間的分布を表す時間語彙」の振る舞いは説明されるとしている。

2.4. 探索仮説による時間と空間の関わり

「空間的分布を表す時間語彙」の振る舞いに「視野」「探索」などが大きく関わっているとすると、空間メタファーを基盤とした時間語彙の理解についても1つの分析が得られる。具体的には、「具体から抽象へ」という空間メタファー論の基盤となる論旨に、一つの疑問を投げかけることになる。

一般に、「人間にとって空間は時間より分かりやすく基本的」とであるとされるが、「探索」が採用されたことによって、「人間にとって空間は時間より、分かりやすく基本的とはかぎらない」可能性が出てくる。空間一般がどれほど分かりやすく基本的としても、話し手がある個別空間を見知っていなければ、その個別空間は話し手にとって分からないものに過ぎない。「分かりやすさ」という尺度で言えば、時間の方が「見知らぬ個別空間」よりも分かりやすく基本的である可能性があるのだ。

そのため、個別空間のアリサマを語る場合には探索という体験の時間を基にして表現する。それが「空間的分布を表す時間語彙」という現象である。空間と時間の関係は、空間を「空間というもの一般」と「個別空間」にわけて論じる必要が生まれ、「何をもって基本的であるとするのか」という問題は改めて検討し直される必要があるということになる。

3. 「探索仮説」の検討

以上のような分析により、定延は「空間的分布を表す時間語彙」の仕組みを紐解いている。こうした「探索仮説」による分析で端的に現れた白眉な点は、その時間と空間の関係性についての主張である。「そもそも空間と時間を峻別することに疑問を呈する(定延 2002: 186)」とあり、この現象の分析は、ダイレクトに空間メタファー論に対する1つの反証と見ることが出来るだろう。そして、その背景として「探索」と名付けた「体験」に裏打ちされた事象を持ち出した点についても興味深く、実際の経験基盤に様々な因子を探るといって、認知言語学の方角性として正当なものである。

しかし、この仮説についても、いくつかの疑問点は残っている。この節ではそうした「探索仮説」に至るまでの分析過程に対する疑問点をあげ、さらに本論で主張する「同時的知覚」との関係性に言及していく。

3.1. 視野仮説の有効性

大きな疑問の1つは、果たして定延の仮定した「視野仮説」というものがあるのかどう

か、という点である。確かに「空間的分布を示す時間語彙がある」という主張に対して「それは空間的分布ではなく時間分布である」という反論はありえるだろうが、仮に視野仮説を採用したとしても、それだけでは対象となる現象が時間分布を示しているということにならない。

例えば定延の推論の通りに (1a) の例文を「走行中のバスから流れゆく車外風景を眺める私の視野内に、先刻レストランがあった（つまりつい今しがたバスからレストランが見えた）けど～」という意味内容であると解釈したところで、結局「私が先刻視野に入れた場所」に言及していることには変わらず、つまりは「空間分布」を示すことになっている。「経験」という 1 つの事態から特定の時間要素、空間要素を示そうとする場合、例文のような場合には時間と空間が 1 対 1 対応している。

(9) (東京から新幹線に乗っており、新大阪付近で)

- a. 「東京から何も食べてないんだ」「へえ、3 時間くらいだな」
- b. 「3 時間も何も食べてないんだ」「へえ、東京からか」

その上で、(1a) の例文の場合、「さっきのレストラン」が「数秒前まで存在していたレストランが現在は無くなっている」などということは意味しないわけで、時間的な要素に言及したのでないことは瞭然である。視野という概念を導入しようがすまいが、この表現において表示されたのは、あくまで「空間的分布」なのではないだろうか。もしそうであるならば、定延によって言葉を尽くして提案された「探索仮説」の付加は多少的外れな印象が拭えない。

「視野仮説」という仮想的な反論を想定しないとすると、「空間的分布を表す時間語彙」という現象は、「時間的な表現が基本的で、空間表現が派生的な語彙」というだけの存在になる。そして、その背景に必要なのは、上記のような「経験」を基にした時間と空間の対応関係、つまり経験から同時的に獲得された出来事概念に集約されるのではないだろうか。このことは、定延がとりあげた数々の「問題点」を 1 つずつ解体することで検討される。

3.2. 問題点の再分析

以下では、定延が「視野仮説」を導入しても説明出来ないために「探索仮説」を採用する論拠となった 4 つの疑問点を、改めて検討することにする。これらの問題点について、「視野仮説」に含まれる以外の理由が存在したり、そもそも問題ではなかったりした場合には、自ずと「探索仮説」の必要性は不確かなものとなるだろう。

●問題①・空間表現の選り好み

(1b) 本当に怖いところもときどきあったけど、まあ楽しかった。

(3b) ?うちの近所にはテニスコートがときどきあります。 (再掲)

(3b) の例文に関して、「視野に入れることが出来るのに不自然なのは何故か」という問題を取り上げていたが、むしろ問題となるのはあくまで「経験」が背景としてどの程度反映されるか、ということではないだろうか。「ときどき」という語彙に含まれる「偶発性」の意味は無視出来るものではなく、「正確にその存在する(空間的、時間的)位置を把握していない場合」においてのみ、「ときどき」という語彙が用いられると考えれば、(2b) が不自然なのは単に「ときどき」という語彙が持つ意味の問題に集約される。このことは、「時間→空間」という次元の差がなくとも存在するものであろう。

(10) a. ?うちの学校はときどき期末テストがあります。

b. ?うちの学校では、ときどきチャイムがなります。

●問題②・時間語彙の選り好み

(3) {今/?数秒前に} レストランがあったよ。 (再掲)

(3) の例で「数秒前」よりも「今」のような時間語彙が好まれるのは探索という体験の表現に成立する現象であるためであるということだったが、概ねこの説明で的を射ていると思われる。さらに「経験」という因子に引き寄せるならば、(1a) の場合の「さっき」やこの例の「今」に比べて、「数秒前」の場合、どうしても時間的な分布を強く想起させるため、時間から空間への橋渡しが行いにくい。これは、具体的な数値や単位が存在が大きいと考えられる。言い換えれば、これらの「具体的な数値や単位を含む語」については、特定の要素(時間要素、空間要素)に強く焦点化されるもので、他方の要素を持つ語として理解されにくいとも言えるだろう。このことは、時間や空間のどちらかに寄せた例文を観察することでも確認出来る。

(11) a. つい数百メートル向こうにレストランがあったよ。(空間)

b. 数分前に大原さんが来たんだけど。(時間)

また、以下の問題についても「語彙の持つ特性」と考えるより他無いと思われる。

(5) a. なにしろ田舎だから無人駅がしょっちゅうあるわけよ。

b. ?なにしろ田舎だから無人駅がいつもあるわけよ。

(再掲)

この現象については、前節では「常時性の時間語彙は規則的な分布を表すので体験のまま表現する必要が無い」と説明しているが、常時性と生起の不自然さの関係には疑問が残る。似たような常時性をもつ「ずっと」の場合、その容認度は随分変わってくる。(12)のような事例については、常時性を持つはずなのに用いることが出来るのは何故だろうか。

(12) a. ?なにしろ田舎だから無人駅がずっとあるわけよ。

b. なにしろ田舎だから無人駅がずっと続くわけよ。

c. ずっと麦畑。

●問題③・分散の必要性

ジェットコースター3周の例から「領域を熟知してしまうほど知っている場合には探索の必要が無い」とまとめているが、この例の場合も、「ときどき」という語彙の持つ偶発性を含む意味の問題にまとめられると考えられる。その証拠に、「ときどき」が明らかに時間語彙として用いられる場合にも、この制限は適用される。

(13) a. 京大ではときどき妙なイベントがある。

b. (大学の学部で7年過ごして)?京大ではときどき入学式がある。

●問題④・存在表現とアリサマ表現

これに関しても、やはりこの現象に特有の制限ではないと考えられる。そもそも (6b) の文は、「空間的分布を表す時間語彙」を用いずとも、意味の通らない文である。

(14) a. あの丘を越えたら大きい木がありますよ。

b. *あの丘を越えたら木が大きいですよ。

このように、定延が取り上げた問題のほとんどは、「時間語彙を空間表現に用いる際に発生する制限」などではなく、単に「時間語彙(と呼ばれるもの)を用いる際に現れる制限」でしかない。もちろん、このことと「視野仮説」の有効性は何の関係もなく、「空間的分布を表す時間語彙」の特殊性が揺らぐものではない。むしろ、ここで問題となるのは、空間的にも、時間的にも共通して用いられた「文字通りの意味」の方であろう。そもそもの問題として、定延は何をもって「時間語彙」「空間語彙」という隔たりを設けたのかが、はっきりしていないのだ。

3.2.3. 時間語彙の持つ同時的知覚

これまでの検討によって、「空間的分布を表す時間語彙」を分析する際には「視野仮説」および「探索仮説」では不十分であることが確認された。しかし、これまでの反証においても、その不足が示されただけであり、問題となる要素は多く孕んでいる。それは、再三現れた「語彙の特性」、「文字通りの意味」といった文言である。「何故そのような意味で理解されるのか」という問いに対し、「その語にそのような意味があるから」という解答は、まったく説明能力を持たない。そこで、改めて「語彙の特性」とは何か、元来「時間語彙」と認められ、それ故に「空間的分布を表す時間語彙」と称される振る舞いを見せる数々の語彙が、どのような性質からこうした現象に現れるのかを、「経験を伴う同時的知覚」を中心に検討してみたい。

4. 経験を伴う同時的知覚

4.1. 時間と空間の両義的な分布

上記のような様々な問題が立ち現れる根本的な原因として、「時間語彙」「空間語彙」という用語の規定に全く神経が払われていないという現状があると考えられる。例えば何度も例であがっている「さっき」という語は「時間語彙」もしくは「時間語彙が空間を表す特殊な例である」とされるが、「さっき」が「時間語彙」であるとする論拠は与えられていない。他にも「いつも」や「ずっと」といった語自体に「空間語彙」「時間語彙」といったデフォルト値を与えることが出来るのだろうか。

まず、この問題にトップダウン的な仮説を与えるとするなら、「空間語彙・時間語彙」という区分をデフォルト値として語彙自体に与えられることは困難である。あいまいな言い方になるが、あくまでその語が用いられたその場の意味において、その語に現れる「時間的な要素」「空間的な要素」に大小が生じているのみである。

- (15) a. さっき、キムが来たよ。
 b. さっきのページに間違いがあったな。
 c. さっき、新しい店があったね。

(15) の例では、同じ「さっき」という語を用いているが、(15a) から(15c) と、そこに現れる「時間性」「空間性」に差異が感じられる。(15a) で用いられる「さっき」は時間的な要素を指示する意味合いが強く、(6b) はやや微妙である。(6c) になると、「空間的分布を表す」と言われていることから分かる通り、空間的な意味合いが強くなっていく。このように、1つの語彙においても、そこに現れる「時間成分」「空間成分」はまちまちであり、実際の使用によって割合が変化する。その上で、「さっき」は「時間的な要素を指示する割合が高い」語であることから、これを単純化して「時間語彙である」と呼称することになる。「あいだ」のような抽象度の高い語彙においては、この偏りが出にくく、「空間／時間」語

彙としての総称を決定しにくいものと考えられる。結局のところ、これらの語彙の特性を決定するためには、同時に知覚した「時間と空間の総体的経験」から、どちらの要素を焦点化させて取り上げるか、ということを考える必要があり、このことを、「同時的知覚」と呼称したい。

3.2. 「ときどき」の同時的知覚

(1b) や (3b) であげられた通りに、「ときどき」は「空間的分布を表す時間語彙」を形作る。この時に、(3b) の方は不自然になってしまうという問題があり、これについては、「ときどき」の持つ「偶発性」に関わるのではないかということを指摘した。ここで、以下の例を見る。

(16) この学校では、ときどき授業開始の鐘が鳴る。

(16) の例文を読んだ場合、普通は「授業が始まる前には必ず鐘が鳴る」という読みにはならず、「何らかの理由で昨日は1時限目と3時限目になり、今日は2時限目に鳴った」とか、「毎日3時限目には鳴らないけれども2時限目と4時限目には鳴る」というように、ある程度の不規則な要素を孕む読みになる。毎時必ず鐘が鳴るならば、「ときどき」を用いた(16) は不自然になるだろう。不規則性が含まれる「この学校のチャイムは壊れているので、ときどき鐘を鳴らす」ならば問題ない。

このような差については、純粋に「ときどき」がどのような意味を持つか、ということに理由を求める以外にはなく、「ときどき」という語彙に認められる「同時的知覚」としては、なんらかの「偶発的事象」が含まれるのは間違いない。「反意図性」と言い換えてもいいだろう。

(16) の例では「鐘が鳴る時間」という時間要素が焦点化しているために時間語彙であるように思われるかもしれないが、「不規則に鳴る鐘を聞く」という出来事には、時間の他にも様々な状態が関わってくるものであり、この時にも概念的には明確に分化されない、「同時的な偶発性」とでもいえる要素が「意味」となる。

3.3. 「ときどき」の同時的分化

「ときどき」とは、漢字で表記するならば「時々」である。そこにはあまりに明示的な「時間要素」への焦点化があり、純然たる時間語彙のみを持った語であるとの認識が強いことは、十分に想定出来る事態である。「ときどき」に時間語彙としての用法以外に、空間用法への分化が見られるのであろうか。ここで、以下の例を参照したい。

(16) a. 本当に怖いところもときどきあったけど、まあ楽しかった。(再掲)

b. ?うちの近所にはテニスコートがときどきあります。(再掲)

c. 通学に使っている電車の線路沿いには、テニスコートがときどきある。

改めて (1b) (3b) でとりあげた事例であるが、この時の (16a) は、「ときどき」を用いて空間的要素に言及した、「ときどき」の空間用法と考えることが可能ではないだろうか。この例において、発話者の経験した「怖いところ」は発話者の意図したポイントではなく、突如として「経験した」「怖い時間を経験した空間」であり「怖い空間を経験した時間」である。こうして「偶発的经验事象」を表す「ときどき」を用いて、経験した時間ではなく、場所に言及した表現と見なすことが出来るのではないか。

ここで比較したいのは、(16b) と (16c) の対比である。(16b) が不自然であることは前述の通りだが、これに文脈を付け加えた (16c) の場合には、その容認度があがる。これは一体何故か。

考えられる理由としては、(16c) の例文の場合、「通学」という文脈の背景が付け加えられたために「移動」のイメージが強く喚起されるということがある。そのため、「移動中にテニスコートを視認するという偶発的经验事象」が喚起され、「ときどき」の使用が可能になる。他方、(16b) の場合には、具体的な「偶発的经验事象」のイメージが喚起されない。「うちの近所」にテニスコートが点在することには偶発性は無く、ただ「そこにある」だけである。このため、具体的な経験から想起されるような「ときどき」の同時的知覚に適合する意味内容が喚起されず、このような例は不自然となる。

3.4. 同時的知覚と「空間的分布を表す時間語彙」の関わり

以上のように、「空間的分布を表す時間語彙」という現象は、元来時間要素に焦点化する比重（頻度、と置き換えても良いかもしれない）の高かった語が、事態の双方の要素が想起可能な状況下において状態要素について焦点化し、「空間語彙」に近付いた形のことであると推察出来る。言い換えるならば、この時に「時間語彙」と呼ばれていたものが、「時間語彙」という絶対的なステータスを獲得しておらず、「空間語彙」として振る舞うことも可能であったというだけのことである。

そして見方を変えれば、こうした現象が起こりうるということ自体、多くの語には「同時的知覚」と認定される「事態把握を根本とした概念体系」が存在しているということの裏付けにもなるだろう。

4. まとめ

「時間語彙」「空間語彙」という要素について考える時に、「空間的分布を表す時間語彙」という現象は、その独特の振る舞いから興味深い対象であった。そして、その根底にあるものは、「時間語彙」や「空間語彙」といった一意的な認定から解放された、概念としての体系的な「語彙」である。その中において時間要素と空間要素は等しく存在すべきであり、具体的にどういった要素に意味が焦点化されるかによって、改めて指示する要素が決定さ

れる。「空間語彙」が「時間語彙」に写像されることを前提とした時には、このような時間と空間の渾然となった状態というものを表示するのは困難であり、それ故に「空間的分布を表す時間語彙」という現象が特殊な状態に見えてしまう。こうした錯誤に陥らないためにも、まずは「時間語彙」とは何であって、「空間語彙」とは何であるか、という部分を突き詰めねばならず、それすなわち「時間とは何か」を問い直すことを意味する。

本論では、そうした根本的な概念を「時間語彙」の方向から問い直すきっかけとして、「空間的分布を表す時間語彙」を手がかりとした「同時的知覚」の姿を提示した。今後は、今回取り扱った副詞類についての精緻化はもとより、更なる言語事例、成分においても同様の論証が求められる。

参考文献

- 深田智・仲本康一郎. 2008. 『概念化と意味の世界』東京: 研究社.
- 本多啓. 2005. 『アフォーダンスの認知意味論 生態心理学からみた文法現象』
東京: 東京大学出版会.
- 楠見孝 (編) 2007. 『メタファー研究の最前線』東京: 大修館書店.
- 松本曜 (編) 2003. 『認知意味論』東京: 大修館書店.
- 宮島達夫・仁田義雄 (編) 1995. 『日本語類義表現の文法 (上) 単文編』東京:
くろしお出版.
- 中村ちどり. 2001. 『日本語の時間表現』東京: くろしお出版.
- 定延利之. 2000. 『認知言語論』東京: 大修館書店.
- 定延利之. 2002. 「時間から空間へ? --<空間的分布を表す時間語彙>を巡って」, 生越直樹 (編) 『対照言語学 (シリーズ言語科学4)』183-215. 東京:
東京大学出版会.
- 佐々木正人・三嶋博之 (編) 2001. 『アフォーダンスの構想』東京: 東京大学出版
会.
- 碓井智子. 2004. 「空間から時間へ ~写像の動機付けと制約~」, 『言語科学
論集』No.10: 1-17. 京都大学.
- 渡辺実. 1995. 「所と時の指定に関わる語の幾つかー意味論的に」, 『国語学』
No.181: 18-29. 日本語学会.